大学時報

2024 09

No. 418

｜特集｜

通信課程教育の現状と可能性

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748　2024(令和6)年09月20日発行〔隔月刊〕

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

流通科学大学

キャッシュレジスターと中内功

アンティークなレジスターの並ぶ壮観な光景

キャッシュレジスターの響き

学生たちの声がこだまする学内レストランの一画に、「キャッシュレジスター博物館」がある。本学の創設者・中内功が長年にわたって蒐集(しゅうしゅう)していた、19世紀後半の木製レジスターから20世紀末のＰＯＳレジまで、計77台を展示している。

「私にとってキャッシュ・レジスターの響きは、この世の最高の音楽である」。これは、中内が１９６９年に著しベストセラーとなった『わが安売り哲学』のまえがき冒頭部にある一節である。

キャッシュレジスターは、商品の売り上げを〝どんぶり勘定〟ではなく科学的に管理・分析するための、小売業の近代的マネジメントに欠かせないツールである。レジ打ちの音が鳴り響くのは、そのマネジメントが奏功して魅力的な品揃えが実現し、来店客がそれを評価して商品が購入されてゆくことの表れである。日本の流通革命を牽引しダイエーを日本一の小売業に育てた、中内らしい感性による表現だと言える。

科学的手法で流通の問題にアプローチすること、人々に喜びを与える新たな価値を社会に提案できるような人材を育てることは、いずれも流通科学大学の建学の理念、教育方針である。学生たちには、このフロアへ足を運び、アンティークなレジスターが並ぶ壮観な眺めから先人の想いを受け取り、日ごろの学びにおける心構えを養ってもらいたい。

University Current Review
大学時報
2024.09／NO.418
CONTENTS

だいがくのたから　流通科学大学　10
大学点描　慶應義塾大学　16
巻頭言　ペンは剣より強し　伊藤公平
視点　課題設定・解決力を涵養するリベラル・アーツ教育
—聖心女子大学の試み—　安達まみ
座談会　大学発 進化するリカレント教育—生涯にわたり学び続ける意義—　32
梅本剛正／髙梨博子／矢口悦子／守口剛／（司会）音好宏
特集　通信課程教育の現状と可能性
大学通信教育の規模・アクセス・質とその課題　高橋陽一　34
革新と守旧—慶應義塾の挑戦—　大屋雄裕　40
法知識の普及を目指して—中央大学法学部 通信教育部の現状と課題—　森光　44
社会と芸術の新たな関係を目指して　範國将秀　52
通信教育が直面する課題　貝英幸　54
フルオンライン大学の進化と将来性
—サイバー大学の教育テクノロジーと社会的貢献—　川原洋　58
ずいそう　平和構築の困難さ　山崎日出男　64
小特集　学術情報流通をめぐる課題への対応
学術論文等のオープンアクセス化の推進　石川貴史　66
国内電子ジャーナル転換契約の動向　成澤めぐみ　68
国内電子ジャーナル転換契約の動向　74
OA推進と外国語学術図書出版推進プログラム　矢野均／中原康行　80

古代より中国で使用され、アラビア商人を経由して西方に広まり、中世ヨーロッパの航海に革命をもたらした羅針盤。表紙デザインには、社会の変化が著しい現代において、大学の“今”を映し出し、向かうべき未来をはかる指針とならん、という思いを込めています。

86 研究成果公開の取り組み―明治大学のオープンアクセス―　久松薫子

寄稿　［私立大学のミライ―研究編―］

90 文化のバトン（文化遺産）を未来へ繋ぐ保存修復科学　北野信彦

寄稿　［私立大学のミライ―教育・地域貢献編―］

96 大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出
―〝FUスポまち〟コンソーシアムの挑戦と自走化―　乾眞寛

私の授業実践～教育現場の最前線から～

104 授業内容の充実と認知負荷低減の両立の試み　鹿内勇佑

明日への試み　甲南大学グローバル教養学環

106 新たなグローバル教育「STAGE」の始動　野村和宏

加盟校の幸福度ランキングアップ《ボードゲーム・カードゲーム編》

112 企業だけではつくりえない大きな価値
―楽しく英語に親しむカードゲームの開発―　目久田純一／﨑野温代

114 高齢者の災害時受援力を高める：防災ゲームの製作　澤田景子

116 ゲームの世界だからこその学び　白澤秀剛

クローズアップ・インタビュー

118 株式会社日本ヴァイオリン 代表取締役社長　中澤創太さんに聞く　（聞き手）外川智恵

執筆者・出席者のご紹介（掲載順）　128

私大連ニュース　130

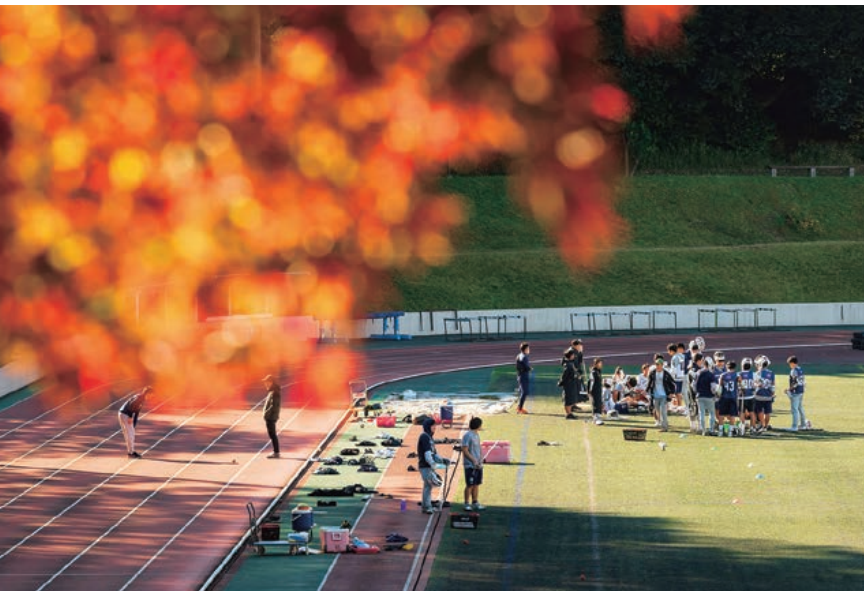
132 **編集後記**

大学点描

慶應義塾大学
Keio University

ガクモンノススメ

ガクモンノススメ



Keio University

ガクモンノススメ

「学問のすゝめ」150周年プロジェクト

ガクモンノススメ 動画公開中

www.keio.ac.jp/ja/gakumon150/

University Current Review

大学時報

2024.09／NO.418

ペンは剣より強し

伊藤 公平　慶應義塾長

２本のペンが交差する慶應義塾のマークは、明治中期に学生のアイデアで生まれた。和装を洋装に変え、学帽にペンマークを掲げたのである。その後、１９００年には正式な記章になった。１９００年といえば日清戦争が終わり日露戦争に向かっていた年だ。混迷の度合いを深める現在の国際情勢と重なる。学生の自主的な活動を尊重し、法人としての自律性を発揮できるのが私学である。豊かな社会の源泉としての平和を皆で守っていきたい。

視点

課題設定・解決力を涵養する リベラル・アーツ教育
―聖心女子大学の試み―

安達 まみ
聖心女子大学学長

1．リベラル・アーツの現代的挑戦

聖心女子大学は創立当初から人文科学・社会科学・人間科学系の学びに知的基盤を与える「リベラル・アーツ教育」を実践し、深い専門性と広い視野の両立をめざしてきた。創立75周年を記念した2023年度には、変わりゆく社会をよりよく生きる力を身につけるためにAIデータサイエンス科目を必修化し、7分野からなる「聖心リベラル・アーツ群」を設置した。2025年度の「応用・基礎レベル」認定に向けて、2024年度にはデータサイエンス教育をさらに充実させている。統計、データ等を駆使した学びが心理学や社会調査等の分野を中心に数多く提供されており、学生は学問教育のなかで、スキルを磨き、知見を深める。

また、本学は創立以来、レイトスペシャライゼーションを堅持してきた。すべての学生は入学後、初年次は基礎課程に所属し、2年次から8学科2専攻に進む。分野横断的な学びをとおして柔軟な思考や多分野の知見を養い、早くから物事を俯瞰する視点を培う。多様な専門性を身につけることで、限定的な専門知識で対応できない局面にあっても別の分野の知識を活かす、あるいは複数の専門を組みあわせて問題解決に臨む力を養う。

社会貢献・社会実践は理念の根本にある。本学の教育理念は、一人ひとりの人間をかけがえのない存在として愛するキリストの聖心(みこころ)に学び、自ら求めた学業を修め、その成果をもって社会との関わりを深め、よりよい社会を築くことに貢献する賢明な女性を育成することにある。

この理念に基づき、本学は国連難民高等弁務官として世界に貢献した第1回卒業生、緒方貞子氏をはじめとする多くの女性のリーダーを輩出してきた。現在の学生のアセス

メントテストの結果においても、成長を実感しており、「協働的思考力」「リーダーシップ」「コラボレーション」経験の値が全国平均を上回っている。本学は学生数約２０００人、専門課程の1ゼミあたり学生数約7人と少人数教育に適した環境で、グループワーク等の打ち解けた雰囲気で切磋琢磨し、互いに支えあい高めあい「調整型」リーダーの資質を磨いているといえよう。社会問題が複雑化している現代にこそ求められるリベラル・アーツ教育のさらなる挑戦として、創造的発想でよりよい社会を築くために課題をみつけ解決する能力を涵養する本学の学びの特徴のひとつである、産学連携の試みについて述べたい。

2．未来に向けて社会実践力を高める

高い就職率を有している本学は初代学長の言葉にあるとおり、「社会のどこにあっても愛の灯を掲げる」女性、それぞれの場所で他者のために働く女性を送り出してきた。女性が一生にわたり、仕事をつづけることが前提になった今、早くから地域や企業等の現場との協働を体験し、社会と繋がることの楽しさや奥深さを知り、課題提起・解決力を高め、社会貢献・社会実践の取り組みに確かな手ごたえを感じる機会を提供することは、大学の重要な役割のひとつである。本学の教育活動のあらたな動向として、さまざまな産学連携の課題解決型授業を用意している所以である。ジェンダーやジェネレーションにかかわる視点から、あらたな価値の創出に携わる可能性について、企業等から寄せられる期待に応え協働するのも女子大学ならではの社会的な役割であろう。直近で産学連携協定を締結した企業・団体には、２０２４年3月にあいおいニッセイ同和損害保険（株）、並びに（一社）電子情報技術産業協会（ＪＥＩＴＡ）、7月に（株）ＡＮＡ（全日本空輸）総合研究所がある。

まず、あいおいニッセイ同和損害保険（株）との連携協定の一環である課題解決型授業を紹介したい。聖心女子大学では東日本大震災の翌年から、講義「災害と人間」を開講し、例年、教員たちが各自の専門の視点から授業を行い、災害が社会や人々の生活に及ぼす影響を多角的に考察してきた。開講13年目となる本年度は、企業側からゲスト講師が登壇し、保険という制度が、被災した人々の資金的支援に留まらず、新たなスタートを切るための一人ひとりの心理的支援でもあること等を実例をもとに

講じた。また、同社が開発したＧＰＳを使用した防災・減災アプリ「ｃｍａｐ」も紹介された。学生たちは自らのスマートフォンにダウンロードし、このアプリの活用方法や普及のための方策について、グループで議論した。

授業後に学生から「保険という制度が災害復興に大きな役割を果たしていることを改めて認識し、将来、復興支援にかかわる仕事をしたいと考えていたが、その選択肢が広がった」「自分たちの意見が実際に事業に取り入れられるかもしれないと聞き、自身の学業が実社会と繋がっていると感じた」等という感想が寄せられた。

次にＪＥＩＴＡとの産学連携では、同協会の調査の一環として、本学学生がＺ世代の考えるテレビの未来像に関する企画を提案。後日、幕張メッセにて開催された音や映像、通信技術の展示会イベントに登壇した。放送事業者や官公庁の担当者に向けて、若者の視点からテレビ利用について行った発表では、若者が実はスマートフォンやパソコンで見逃し無料配信動画サービスを利用して、コンテンツ（番組）自体は視聴していること、推し活のためなら高画質・大画面のモニターは需要があることを論じ、好評を得た。

さらに、（株）ワコールとの産学連携授業では、３Ｄボディースキャナーを用いて自分の身体の３Ｄ映像等のデータを得るサービスについて、体験と取材の後、同世代への浸透のための企画を立案、企業側に提案した。「現場で仕事をする方と議論ができ、日ごろの学習が実社会に役立つことを実感できた」との学生の声にたいして、企業側からは「将来の市場を担う若い世代の意見は貴重。斬新な発想もあり、今後のビジネス展開で活用できそう」との講評があった。

いずれも学生が自らのデータリテラシーをとおして社会実践に携わり、企業と協働してあらたな価値を創り出す展望を描く契機となった。

つづいて翻訳の学びや英語学習者としての経験等をとおして社会実装に繋がる試みとして、（株）ムーミン物語との協働を紹介する。

３．物語の世界を社会実装に繋げる

筆者は２０２１年度と２０２２年度に埼玉県飯能市のムーミンバレーパーク（（株）ムーミン物語の運営施設）との産学連携授業を担当した。同パークはトーベ・ヤンソン作『ムーミン』の物語の世界への体験型導入の役割を担い、世界でフィンランドのナーンタリと飯能市の２

カ所にのみ開園している。（株）ムーミン物語は国際的な企業であり、権利関係はフィンランドのライセンサーとの調整を要する。パークの常設展示施設コケムス立ちあげの折に、施設担当者が筆者に英語解説監修を依頼、そのときの企業側との対話のなかから企画展示に学生の学びを活かすという発想が生まれた。

(1)企画展示のキャプション英訳と全国への巡回

２０２１年度は同年7月にオープン予定の企画展示「ムーミンの食卓とコンヴィヴィアル展―食べること、共に生きること」の展示キャプションの英訳を学生が担当し、来園者用に掲示された。

度重なる緊急事態宣言が発令された２０２１年、３月末にスタッフの案内によるパークの視察にこぎつけた。その後ゲスト講師に迎えた展示企画責任者並びに日本語解説監修者より企画展の理念が示すあらたな価値「コンヴィヴィアル」（「共生」）と概要やその背景となる北欧文化を学び、並行して作品を読みこんだ。翻訳の作業は展示のセクションに応じてグループワークによって行われ、日本語キャプションを自然な英語に置き換え、一般に通用する翻訳に必須の一貫性や高度な品質を担保すべく訳文の推敲を重ねた。訳文が完成すると企業側の意見を踏まえて微調整した。7月の企画展オープンにあたり、実習として来園者へのギャラリートークの形で、各自作成した訳文の解説を行い質問に対応した。

学生からは「推敲を重ねる翻訳作業により物語への案内人になれた」「テーマを形にすることで今の時代に必要な価値の創造に携わった」等の声が寄せられた。一方、来園者からは、学生との質疑応答により「翻訳の意図を聞けて勉強になった」「英語キャプションをとおしてムーミンの世界への理解が深まった」等の感想があった。

本展示は２０２２年10月までパークで展示された後、富山市ガラス美術館（２０２２・11・３～２０２３・１・29）、茨城県陶芸美術館（２０２３・３・18～２０２３・６・11）、山口県立萩美術館・浦上記念館（２０２３・９・16～２０２３・12・３）、岐阜県現代陶芸美術館（２０２３・12・16～２０２４・３・３）、兵庫陶芸美術館（２０２４・３・16～２０２４・５・26）、小海町高原美術館（２０２４・６・15～２０２４・10・６）等に２０２４年10月まで巡回中。各美術館で本学学生のキャプションが来訪者を迎えている。

⑵アクティブラーニング教材の共同開発から販売まで

２０２２年度は（株）ムーミン物語と共同で、ムーミンバレーパークのアクティブラーニング教材を開発、教材は商品化された。具体的には来園者がパークを巡りクイズを解く等してムーミンの世界に触れながら英語を学べるキットを作成した。背景には、遠足等でパークを訪れる近隣や遠隔の学校から施設内で学ぶ教材を求める声があった。

２０２３年４月からの使用を目指してキットを作成すべく、２０２２年４月に現地を視察し、パーク各エリア・施設等の役割を確認した。企画担当者の解説によりパークの理念と概要を把握し、来園者のニーズについて企業側と意見交換した上で、翻訳協力者によるワークショップをとおして翻訳のスキルを高めた。作業は基本（「ムーミンパパ編」）と応用（「スナフキン編」）の２つのレベルに応じてグループワークによって行われた。

学生たちは入園者が使用するキットの内容や形態について企業側に提案し、原作の面白さを英語を通して伝えられるようデザインに落としこみ、形にしていくという、創造的なプロセスを辿った。翻訳、文学、英語教育等複数の分野を横断する学びに英語学習者としての自らの経験や遊び心を加味し、道順に沿ってヒントを見つける工夫、他の人と協力して解く問題やキャラクターの豆知識の挿入等、ゲーム感覚で学べるキットを作成、フィンランドのライセンサーの指摘に応じた調整を経て完成させた。キット導入にあたり、同年秋、入園者を対象に各自作成したクイズ等の解説と質疑応答からなる実習を行った。

学生からは「キットは中学校や高校の教科書に掲載された単語や文法を使用した問題で構成されている。多くの方々が英語学習をとおしてムーミンの世界を楽しめるよう作成に励んだ」「本取り組みで、翻訳が社会のなかで人と人を繋ぐ架け橋になることを実感した。今後の大学の学びでも、多様な翻訳についての理解を深めたい」とキット作成の留意点や翻訳の意義についての気づきが寄せられた。

アクティブラーニング型キット「MOOMINGLISH」

キットの題名「MOOMINGLISH」、副題「Into Moominvalley Park」も学生が考案した。「ムーミンにまつわる英語や文法表現を、自然豊かなムーミンバレーパークを散策しながら学ぶことができるアクティブラーニング型キット」と銘打たれ、５００円（税込）にて好評発売中である。

２０２３年度にはパークに隣接するメッツァビレッジ（（株）メッツァ）との産学連携授業を開始し、２０２４年度も継続中である。専門家と共に近隣の山林を歩いて自然を肌で感じ、英語をとおして地域の小学生及び未就学児と交流する試み、教育教材「子どものための自然マップ」の翻訳へと、本授業は次世代の担当者により発展的に継承されている。

おわりに

これら産学連携授業をとおして、本学の学生は企業の提唱する新たな価値に向けて、リベラル・アーツの学びの特徴を活かして創造的に課題設定・解決に挑戦する経験を得られた。たとえば（株）ムーミン物語との取り組みでは、企画展示の英語キャプションや、英語学習キットという商品の形で、学びと社会が繋がった。企画、デザイナー、営業等さまざまな役割を持つ国内外の社会人のロールモデルと出会い、働き方や業務に伴う責任感に感銘を受けたという学生の声も印象的だ。

今後予定される産学連携の取り組みには、２０２４年８月に（株）ＡＮＡ総合研究所とのイベントがある。（株）ＡＮＡ総合研究所研究員による基調講演に続き「調整型」リーダーを体現するＡＮＡグループ勤務の卒業生をパネリストに迎え、本学の学びをとおして涵養した、現代に息づく英語コミュニケーションとは何かを探る。また、２０２４年度後期から（株）ＡＮＡ総合研究所研究員によりホスピタリティに資する英語についての講義が始まる。今後は、教科書改訂への本学の協力等も期待される。デジタル・生成系ＡＩ時代の到来による社会の変化を受けて、創立以来本学の強みである英語教育の現代的展開をとおして、世界と繋がる好機といえよう。

産学連携授業の企画・運営は他大学でも多くの事例があるものの、大学と企業とのそれぞれの関係を構築していくなかで展開される。それゆえ、ルーティンを超える工夫や配慮を要請するが、その労苦が充分に報われる挑戦である。